

## —音楽療法の立場から—

村井靖児（国立音楽大学）

分裂病の世界に生きることの苦しさを、目に見える形に表現したものとして、絵画ほど心に迫るものはないだろう。ムクの「叫び」、 「不安」は、憎いほどリアルに分裂病者の恐怖の世界をあらわしている。恐らくこの恐怖の体験が度重なる毎に、分裂病者は、己を社会から引き離し、引きこもりの生活に逃れていくのに違いない。彼らはその時に感じた怖さの感情が再燃しないように、危険と思われる刺激を回避するのである。

分裂病者はそのようにして、自分に不自由な生活をおしつけながら、その代償として精神の安定を得、結果として、周囲から見ると次第に分裂病患者らしい生活態度を身につけるようになる。

したがって、不器用で不円滑でごちない彼らの仕草に、慢性分裂病者の病気の現れを見て、その生活の姿勢を矯正しようとする治療的関わりは、やっとのことで作りあげた病気への防衛の鎧を切り裂く可能性を孕んでいる。つまり病状の悪化をもたらし危険があるのである。

彼らが社交ダンスをすることに困難を感じ、古典舞踊なら安心して踊れると言われるのは、社交ダンスの方がより感情を揺らす要因を強く持ち、古典舞踊はそれに対して、仮面をつけて踊る時のように、自分をそれほど赤裸々に露呈することを妨げるからであろう。

筆者はこれまで音楽療法士として、しばしばダンス療法のワークショップに参加した。その時、ダンス療法士に促されてもどうしても出来ない踊りがあった。それは即興的に自己表出を促される踊りである。自分が露呈することを怖がっているのだろうが、体が固くなり、足が出なくなってしまう。どうしても出来ないのである。頭を空っぽにすればいいと分かっているが、それがうまく行かない。

そして考えるのであるが、頭を空っぽにすることによって得られることが、もし分裂病者にとって、折角作り出した病気の防壁を崩すことになるとすれば、そのような治療を、治療者として積極的におし進めることは出来ない。つまり己がそれをするに苦しさを感ずるものを、病者に対して実行することは出来ないのである。

音楽療法では、相手の文化を尊重し、決して治療者側のアイデンティティを患者側に押し付けてはいけないと戒められる。この要請にたいして、音楽の場合には、皆が歌いなれた日本の歌文化が

あるから、それを提供することで問題は一応解決する。しかしダンスの場合は、すべてが患者にとって初めての世界であろう。そこでは異文化との接触の事態が常に引き起こされる。セラピストはいつも新しいことを患者に要求することになり、その場合患者がとても出来ないことまでも彼らに強制してしまうことは無いのであろうか。その時患者はあまりの緊張から昏迷に陥ることがあるかもしれない。

精神病院でダンス療法をしている人たちは、そのようなことをいつも考えているのだと思う。そして患者たちに合ったダンスを提供し、患者たちはそれを楽しそうに踊る。ここで筆者が言おうとする論点は、治療者である自分が、もし頭を空っぽにして、即興ダンスがもつあの得も言われぬ自由で無拘束な浮遊感のようなものを感じてしまったとき、自分の音楽療法もそれに連れて変化してしまうのではないかという恐れである。患者に害になるようなことを敢えて強いてしまうような自分自身になってしまっていたら怖い。たとえそこに自分にとって人間としての素晴らしい拡大成長の機会があるとしても、敢えてそれには関わらないようにしておこうと思うのである。